付篇Ⅰ

昭和53・54・55年度山口大学構内の発掘調査
第1章　昭和53年度山口大学構内の発掘調査

吉田構内人文学部校舎新営に伴う試掘調査

1　調査の経過

新営建物は2棟で、吉田構内の南端中央部に計画された。新営予定地は約900m²で、周辺は東から西に延びる標高約25～30mの洪積段丘[1]が、構内造成工事等によって階段状に削平され、標高約20mの平坦面を形成している。周辺地域では過去に埋蔵文化財の調査がほとんど行われておらず、工事に先立ち事前に遺構の有無を確認する必要があった。調査時点では埋蔵文化財資料館は機能していなかったため、関係部局と協議の結果、調査は人文学部近藤喬一氏に依頼することとなった。調査の方法は、構内造成による埋め土を機械を使用して除去し、それ以下は手掘りによる分層発掘を行った。調査期間は昭和53年12月11日から19日までで、調査面積は約160m²である。

2　調査結果

Aトレンチ

北側の新営建物のほぼ中央に、東西方向に幅3m、長さ21mのトレンチを設定した。構内造成による埋め土（表土）は地表面下約1.3～1.4mまで厚く客土されている。その下には層厚10～20cmの旧水田耕作土と考えられる第3層：黒色粘質土が堆積し、黄橙色粘土の地山に続く。地山はトレンチ西側付近で西に向かって緩やかに下降する。遺構はトレンチ西端部で柱穴状の掘り込みを検出した。出土遺物はなく、時期は不明。遺物はトレンチ中央部付近の旧水田耕作土から須恵器小片3点が出土したほかは顕著な出土遺物はない。

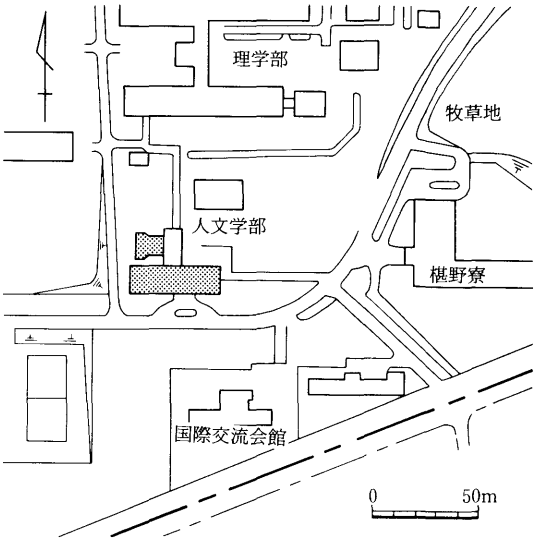

Fig. 56　調査区位置図

Bトレンチ

南側の新営建物の東側に、東西方向に

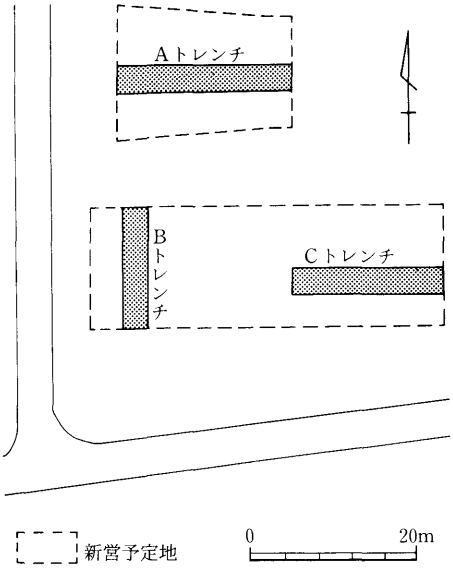

Fig. 57　トレンチ設定図

設定した幅3m、長さ18mのトレンチ。地表面下約80cmまでは構内造成による埋め土で、その下には上位から旧表土と考えられる層厚8cmの第2層：黒色土、旧水田耕作土と考えられる層厚10～15cmの第3層：黒色粘質土が認められる。第3層：黒色粘質土は遺物を包含せず、その直下は黄褐色粘土の地山である。遺構はトレンチ中央部で黄褐色粘土を検出面とする柱穴状の掘り込み2個を検出し、そのうちの1個から土師器片および寛永通宝各1点が出土した。

Cトレンチ

A・B両トレンチの所見から、遺構の埋存する可能性が高いと判断された、南側の新営建物の西端寄りに南北方向に設定した幅3m、長さ14mのトレンチ。堆積層順はBトレンチと同様で、地表面下約1mまで構内造成による埋め土で、その下位には層厚6cmの第2層：黒色土（旧表土）、層厚10～14cmの第3層：黒色粘質土（旧水田耕作土）が堆積する。第3層の直下は黄褐色粘土の地山で、トレンチ北端部では北に向かって下降している。遺物は第3層：黒色粘質土から須恵器小片若干が出土したにすぎず、遺構は検出できなかった。

3　小結

試掘調査は建物新営予定地面積の2割弱について行ったにすぎないが、地下の状況の概要を把握することができたと考えられる。遺構は極めて希薄で近世のものと考えられる柱穴状の掘り込み3個を検出したにとどまり、また、出土遺物の大半は旧水田耕作土中からのものであった。さらに地山が各トレンチとも本学統合移転前の旧水田耕作土の直下に認められたこと、また、新営予定地の東側に所在する洪積段丘が、新営予定地付近でほぼ平坦に造成されていることなどから、過去に遺物包含層、遺構が分布していたとしてもすでに消失している可能性が高い。なお、Aトレンチ西側およびCトレンチ北西端部での地山の落ち込みは、新営予定地の東側から西に張り出す洪積段丘の裾部の可能性がある。

［注］1）河野通弘・高橋英太郎「山口大学とその付近の第四紀層」（『山口大学教育学部研究論叢』第27巻第2号、1977年）。